

変形性膝関節症の病態と治療

大森 豪 先生

新潟医療福祉大学 健康科学部 健康スポーツ学科 教授

人生100年時代と言われ健康寿命延伸への関心が高まり、脚や腰といった運動器の健康維持が重要視されている。膝関節は下肢関節の要であり、起立歩行を含めた日常生活動作に大きく影響する。変形性膝関節症（膝OA）は膝関節の加齢による変性疾患で、我が国における有病者数は2500万人以上と推定されている。本症の発症・進行には多因子が関与しているが、膝関節への荷重負荷による機械的因子（Mechanical factor）の影響は極めて大きい。膝OAの主症状は動作時痛、可動域制限、関節腫脹とされ、膝関節変性の進行とともに緩徐に増悪し重症の時期では起立歩行を含めた移動機能が大きく障害される。さらに、膝OAによる活動性の低下は糖尿病や心血管疾患などの発症につながり最終的に死亡率にも影響する事が報告されている。

近年、予防医学の観点から膝OAに対してもリスクファクターの排除を含めた早期からの対応が推奨されている。また、保存治療においてはいわゆる「再生医療」が膝OAにも導入され短期ではある良好な臨床成績が得られている。さらに、手術治療においても軟骨移植や骨切り術の拡大、人工膝関節置換術におけるロボット手術などの技術革新が行われより良い成績が得られるようになっていく。